様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０２５４

研究課題名（和文）経済学説史におけるフェミニズムの理論領域の可能性についての研究

研究課題名（英文）Study on the possibility of the theoretical issues of the feminism in an History of Economic Thought

研究代表者
舩木　恵子（Funaki, Keiko）

武蔵大学・総合研究所・研究員

研究者番号：００４０９３６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：J.S.ミル『経済学原理』やジェームズ・ミル『経済学綱要』、マルクス『資本論』などにおける女性労働の記述を扱い、経済学が女性の経済問題をどのように分析してきたのかを経済学説史の分野で研究するとともに、19世紀から20世紀にかけてのイギリスにおける女性の経済思想を明らかにした。その結果まだ学問として一般には知られていなかった経済学を普及させたハリエット・マーティノウの影響が大きいことを理解し、マーティノゥ・ソサエテイのコンファランス等で毎年報告し問題意識を発表した。結果、理解や多くの協力を受け現在も密接な研究交流が行われている。

研究成果の概要（英文）：This study presents a description of women's labor in the writing of scholars like James Mill, John Stuart Mill and Karl Marx. The study clearly shows how political economy has analyzed the female economic problem in the history of economic thought. It clarifies economic thought regarding women in Britain from the 19th to the 20th century and examines the enormous influence of Harriet Martineau, who spread ideas about political economy, which generally wasn’t known at the time. As a result, I presented my study at the Conference of the Martineau Society and the UK HETS Conference in 2015. I’ve participated in the Martineau Society Conference every year and have announced my awareness of the issues. Fortunately, these activities have received the attention and cooperation of the other members. We’re currently collaborating on a study exchange.

研究分野：経済学史

キーワード：経済思想　経済理論　経済学説史　リプロダクティヴ・ライツ　同一労働同一賃金　女性労働　賃金基金説　社会経済学

１．研究開始当初の背景

ジェンダーやフェミニズムは、過去および現在においても、主流派経済学にはなじみにくい概念である。2012年3月に共著『ヴィクトリア時代におけるフェミニズムの勃興と経済学』(御茶の水書房)に所収の拙稿「ヴィクトリア時代のフェミニズムにおける経済学の役割」で19世紀の女性問題の解決に経済学が果たした役割を述べたが、それは本研究の動機となった。

当時の主流派、古典派経済学においては女性労働が原理の中でしばしば述べられており、たとえばJ.S.ミルは『経済学原理』の中で人口問題に関連する女性の出産の自己決定権について述べただけでなく、家族労働や女性賃金の低下傾向、女性労働の質の問題などを経済学の分配論の中で説明している。また古典派経済学を批判する同時代人のマルクスも『資本論』において実は、しばしば女性労働の過酷さについて脚注に落として述べている。そこには現実社会を理論に照射したいという経済学者の強い意図を垣間見ることができる。しかしこうしたヴィクトリア時代の経済学者たちの意図は、経済学説史において、理論的究明には当たらないと判断されたのか、ほとんど論点にされてこなかった。女性の労働をジェンダーやフェミニズムではなく、経済学で分析することはいまだに困難であり、不十分なのである。

20世紀初頭にミリセント・フォーセット、エレノア・ラズボウン、ビアトリス・ウエッブらの実践家たちが男女同一賃金について論争を公にすることによって、事態は変化した。男女の賃金差を理論的だけでなく、社会的にどのように分析すべきか、論じるべきかという彼女たちが提起した問題は、最終的にビアトリス・ウェッブの「男女」を抜いた「同一労働、同一賃金」の主張にまで及び、これは現代の多様化した雇用形態の分析に示唆を与えるものとなった(これについては『福祉国家と家族』法政大学出版局・2012年、に所収された拙稿「イギリスにおける女性労働と古典派経済学－ガヴァネス問題から男女同一賃金論まで」265頁～290頁を参照とされたい)。

従って本研究は、女性の労働問題に関する論争の萌芽を経済学に求めようとするものであるが、経済学、経済学者、あるいは経済学を受容した人々などをその範囲に入れて文献的、学術的に明らかにしようと考えた。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は、19世紀から20世紀初頭にかけて、経済学が女性の経済的な諸問題をどのように扱ってきたのかを明らかにすることである。経済学と現実の社会問題とを比較検討し、従来古典的なフェミニズム思想(たとえばメアリー・ウルストンクラフトに代表される)や女性参政権運動の範囲で述べられていた19世紀から20世紀にかけての女性の自立の問題を、女性たちの経済問題とその処方箋である経済学とを分析することによって、女性の経済的自立とそれをめぐる社会問題という構図でとらえることを目的とした。それは何よりも、この時代の階層ごとの女性労働の動向、女性の就業、職業選択、そのための教育などを、社会科学の領域で分析することにより、現代的論点につながる可能性があるのではないかと考えたからである。そのため、本研究では、文献の対象を経済学だけではなく、人々が経済に関心を持つに至った経済学の普及(大衆化)の分析も含めて考えることで、産業、賃金、労働、産児制限や救貧法などの経済学に示される用語の現実の姿を把握し、女性賃金や女性労働の競争的側面や、低賃金、また職域の問題を社会科学的に考察することを目的とした。

３．研究の方法

(海外文献収集と分析作業)

文献収集はイギリスのマーティノゥ・ソサエティ(The Martineau Society: http://martineausociety.co.uk/を参照)のメンバーの助言や協力と、東北地方(山形大学、東北大学)を中心とした経済思想史研究会(http://www.econ.tohoku.ac.jp/~furuya/econthought.html を参照)の協力を得て、国内、国外において収集し、本研究に必要かつ、日本では紹介されていない文献は翻訳や抄訳をして紀要に発表した。

本研究プロジェクトには研究分担者がいないため、研究内容の分析に客観的判断を得る方法として研究会や学会などで報告し、各方面からの意見を受け、研究の方向性に間違いがないかを確認した。初年度から最終年度までの3年間、マーティノゥ・ソサエティで毎年報告する機会を得て、特にマンチェスター・メトロポリタン大学のジョン・ヴィント(John Vint)名誉教授や、ゲイビー・ウェイナー(Gaby Weiner)客員教授、バーミンガム大学のルース・ワッツ(Ruth Watts)教授そして作家のバーバラ・トッド(Barbara Todd)氏には貴重な助言と協力をいただいた。

特にヴィント教授とは、常に意見交換し、研究を報告するともに、この成果報告には間に合わなかったが、共同で論文を発表できたことは大きな成果となった(この論文はRoutledgeから2016年8月に出版予定の*Harriet Martineau and the Birth of Disciplines*に含まれる)。当初よく利用していたウーマンズ・ライブラリーがロンドン・メトロポリタン大学からロンドン大学図書館(LSEライブラリー)に所属が変わり、

しばらく準備期間として利用できなかったため、今文献調査はブリティッシュ・ライブラリーを利用することが多かったが、このことが非常に多くの文献の収集を行うことに成功した。特にマーティノゥの初期作品の *The Rioters* を収集できたのは大きな成果だった。

(二段構えの研究)
　初年度は、19 世紀から 20 世紀にかけての古典派経済学における本研究テーマに関連する分野、特に古典派経済学の賃金論を分析し、課題目的に沿った研究論文を書き、共著の書籍にて発表した。
　次に同一労働、同一賃金の萌芽を含むハリエット・マーティノゥの労働思想の分析をおこない、論文を紀要に発表し、経済学史学会で報告するなどして、古典派経済学の側面とその大衆化の側面からの二段構えの方法で研究をおこなった。

４．研究成果
　19 世紀の古典派経済学はリカードゥ経済学の演繹的な三階級制社会を前提としているため、基本的にジェンダーやフェミニズム思想は問われないという特徴がある。しかし注意してみると、それゆえに経済学者たちは、産業社会における女性労働の動向や 1840 年代以降の中産階級の女性たちの職業や教育など現実の問題を経済学に照射するために独自の方法で経済学の原理に補足していることが文献分析によって理解できた(1.背景参照)。
　リカードゥ経済学を普及させたジェームズ・ミルの『経済学綱要』と、その息子のジョン・スチュアート・ミルの『経済学原理』の分配論について、大きな違いがある。それは前者が女性労働を出産の側面にのみ求めるのに対して、後者は古典派経済学の賃金基金説の枠組みを変えずに、賃金論の一事項として女性の賃労働を分析するという特徴をもつ。しかし 19 世紀の経済学においては本研究のテーマである経済学の理論領域への矛盾のない理論的導入は困難であり、たとえ補論領域への導入は可能でも、理論領域に実証性を導入しようとするとたとえば古典派経済学の賃金基金説のようにその経済学の枠組みを崩壊させかねないことになることが理解できた。
　しかしこうした経済学と経済(社会)問題に架橋と展望を示したハリエット・マーティノゥの『例解・経済学』の分析を行うことで、新たな研究の展望を気づかされた。それは古典派経済学を普及させたマーティノゥが、古典派経済学から 1850 年代に統計データを用いた実証分析に移行していることを理解できたからである。これは経済学説史の分野からすればマーティノゥが経済学から離れたとして位置づけされるものだが、むしろ現代の巾広い経済学の概念から考えれば、経済学に近づいていると分析することが可能である。こうしたことから、マーティノゥの、19 世紀半ばにデータ分析を用いて女性の就労を分析した『女性の勤労』(1859)は、経済学の領域から離れたというよりも、むしろ現代の経済学の理論領域に近づいている可能性を示すものであると理解し、本研究の大きな成果となった。
　またこの方法は、フローレンス・ナイチンゲールの実証分析として時代的に大きな影響を与えるものであり、両者が深い尊敬と協力体制で中産階級の女性たちの経済的自立に貢献していたことをあきらかにした。このことは諸事情があり、予定していた学会誌に投稿ができず、本研究において、主張できない残された結論となってしまったが、ハリエット・マーティノゥの経済学関連の著作の文献分析を中心にして、英国と日本での学会発表と論文の発表をおこない、おおむね一定の成果を得ることができたと考える。まだまだ研究課題は継続して分析する必要があるが、ただしそのことを具体的に示せたことは大きな成果であると考える。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計　3 件）
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

①<u>舩木惠子</u>
翻訳「ハリエット・マーティーノゥの経済思想(1)暴徒・不景気な時代の物語(上)」
武蔵大学総合研究所紀要、No24、査読無、2015 年、61-84

②<u>舩木惠子</u>
Harriet Martineau's *Illustration of Political Economy*: Her style on political economy
武蔵大学総合研究所紀要、No23、査読無、2014年、29―38

③<u>舩木惠子</u>
「ハリエット・マーティーノゥの『経済学例解』第25話「多くの寓話のモラル」」
武蔵大学総合研究所紀要、No22、査読無、2013年、23－40

〔学会発表〕（計　　5 件）
①<u>舩木惠子</u>
Harriet Martineau and Factory of Manchester,
47th History of Economic Thought Conference.2015 年 9 月 4 日,Manchester,(英国)

②<u>舩木惠子</u>
Harriet Martineau's *Rioters* and *Manchester Strike*,
The Martineau Society 21th Conference,

2015 年 7 月 26 日,Norwich,(英国)

③<u>舩木惠子</u>
Harriet Martineau's *Illustration of Political Economy*: Her style of writing on political economy,
The Martineau Society 20th Conference,
2014 年 7 月 24 日,Liverpool(英国)

④<u>舩木惠子</u>
J.S.ミル『経済学原理』賃金論におけるフェミニズム-イギリス・古典派経済学の領域から、
経済学史学会第 78 回大会　共通論題セッション、2014 年 5 月 25 日、立教大学(埼玉県・新座市)

⑤<u>舩木惠子</u>
Harriet Martineau and the Idea of New science,
The Martineau Society 19th Conference,
2013 年 7 月 26 日, Oxford,(英国)

〔図書〕（計　1 件）
①柳田芳伸・諸泉俊介・近藤真司編　柳沢哲哉・真鍋智嗣・松井名津・<u>舩木惠子</u>・森下宏美・中井大介・姫野順一(共著) 『マルサス・ミル・マーシャル―人間と富の経済思想』 昭和堂 2013 年　265 頁
所収　第二部 6 章「J.S.ミルの賃金基金説とフェミニズム」129―154

６．研究組織
(1)研究代表者
舩木惠子（FUNAKI, Keiko）
武蔵大学・総合研究所・研究員
研究者番号：00409369